

奄美だより

浦島悦子

都会を捨て

たたかうシマンチュウとつれ添って

二人の子どもの母となり

百姓やって生きてます



浦島悦子

亀美だより

現代書館

うらしまえつこ
浦島悦子

1948年 鹿児島県川内市生まれ

1970年 九州大学文学部哲学科卒業

福岡で店員・ウェイトレス・業界紙記者などをした後、上京。雑誌『新地平』誌の編集に6年余たずさわり、1980年11月より奄美大島で暮らす。

現住所＝奄美大島宇検村平田 新元方

奄美だより

定価1500円

1984年3月1日 第1版第1刷発行

著者	浦島悦子
発行者	菊地泰博
発行所	株式会社現代書館 東京都千代田区神田神保町2-22-11 ☎(03)261-0778 振替東京2-83725
印刷所	岩佐印刷所
製本所	黒田製本所

©Urashima Etsuko

0036-03191-1935

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

奄美だより米目次

東京からシマへ 5

1

いのちたちの息づかい 18

シマ料理と“味の素” 23

村長選挙てんまつ記 29

干ばつとソテツ 35

ベラウの女たち 39

へだての海を結びの海へ 51

胸おどる季節 60

枝手久祭り 67

奄美の未来を考える 73

シマの冬じたく 80

2

シマの正月 86

シマで産みたい 91

小さいのちの自己主張 98

子どもの世界、大人の世界 104

自立への道はけわし 111

シマ社会と政治 118

琉球弧の女たち 125

死に逝く者と生まれ出る者 134

シマとヤマト 141

選挙フィーバー 151

3

原点はシマなのだ 160

ひさしぶりの東京 170

観光と“独立” 177

しろうと百姓 181

小さいことはいいことだ 188

異常気象 197

シマ暮らし 205

あとがきにかえて 215

東京からシマへ

枝手久闘争

一九七九年一月二九日、おだやかに晴れわたった朝のすがすがしい空気のなかを、わたしは東京・竹橋の東亜燃料工業株式会社（エッソ・モービル系石油資本）本社へと急いだ。この日、同社が奄美大島南部の焼内湾ヤケウミにある枝手久島エゲテグに建設を予定しているCTS（石油備蓄基地）計画の即時中止を求めて、関東奄美青年部（在関東奄美出身者の青年組織）を中心に、奄美現地から駆けつけた人びともふくめた抗議行動が行なわれることになっていた。

当時わたしは、九州から東京へ出てきて五年余り、『新地平』という、労働運動をはじめさまざまな運動の発展と結合の媒介となるべく発行されている月刊雑誌の編集部員（といっても二、三人しかいないので、企画から取材、編集、校正、発送、宣伝、販売と、雑誌発行にともなうす

べての仕事をやらなければならなかった) だった。

その日は、しばらく前に知りあったばかりの関東奄美青年部の呼びかけを受けて、枝手久闘争のなんたるかもよく知らないまま、取材と支援をかねて参加したのだった。

集合時間に少しおくれたわたしを待っていてくれた仲間とともに、東燃本社のあるパレスサイドビルに行く。エレベーターがとまり、ドアが開くと、そこには東燃の社員と思われる男たちが待ちかまえていて、わたしたちを、社内で行なわれていた抗議の座り込みの中へ案内してくれた(一瞬「なんだかおかしいな」という気持がかすめたが、それはまさに「案内」としかいいようのないものだった。過去何回かの抗議行動に際しては、東燃は入口のシャッターを固く閉ざし、抗議団を締めだしつつづけていたのにもかかわらず……)。

それから二時間、東燃側は抗議に対して誠意のカケラさえ見せず、「退去してください」と繰り返すばかり。「東燃こそ奄美から退去しろ」と怒りの声が起こる。整然とした抗議行動にもかかわらず、徘徊する私服刑事の数がだんだん増えてくる。引きあげようということになり、みんなが並んで外に出かかったところに、突如、機動隊一〇〇名以上がおそいかかってきた。後からは東燃の社員がぐいぐい押す。前には機動隊の壁。一人ひとりがもぎとられるように、列から奪いとられ、抗議団四〇人全員が一人残らず逮捕されたのだ。それでも護送車に乗せられるまでは、ほとんどの人が「排除」だとしか考えていなかった。なかには、所轄の麴町署に連れていかれて

からも、事情調取だけで帰されるものと思っていた人もいるという。

まさに、あれよあれよ、という間のできごとだった。わたしなど、まさかこんなことになるのは予想もしていなかったから、取材の道具、いろいろな運動団体のビラ類、そして、ごていねいにも身分証明書まで持参したまま警察に連れていかれてしまった。

抗議団全員逮捕、多数の長期勾留、十数カ所におよぶ家宅搜索、三名の奄美出身青年の起訴、という攻撃がつぎつぎにかけられてきた背景には、莫大な石油を浪費せずには維持できない社会構造をつくりあげてしまった日本政府・資本の「危機」意識があった。産油国の立ち上がりによる石油供給不安からの脱却——つまり、八〇年代にむけて「エネルギー問題」を一気に解消しようと、やっきになって推進してきたものが、CTSであり、原子力発電なのだ。わけでも、それらの拠点として琉球弧（奄美、沖縄、宮古、八重山）がねらわれていた。シマジマを油漬け、死の灰だらけにし、その豊かな自然と人びとの生活を根こそぎ破壊しつくすことによってヤマト国家の維持をはかるなどというのは、とんでもない考えだ（ところが悲しいことに、わたしたちのたたかいの非力さは、金武^{キン}湾のように、それを一部現実化させていた）。

奄美・枝手久のCTS計画は、美しいシマをヤマト資本のゴミ箱にさせてなるものか、という地元住民の強力な反対運動によって、当時すでに七年間、いまだ調査さえさせないという「白星

街道まっしぐら」の実績をほこっていた。一九八〇年を目前にひかえてのこの大弾圧は、運動を一挙につぶすことをねらったと同時に、核燃料第二再処理工場建設の最有力候補といわれていた徳之島（奄美群島のひとつで、奄美大島の南にある）に対する予防弾圧とも受けとれた。

逮捕・勾留・取調べ

さて、逮捕されたものの、わたしはありがたいことに権力側の人間から見るといかにもにくにくしげな顔をしているのだろうか、わたしに型通りのことをたずねていた若い機動隊員に、「こいつのツラを見ろ、しゃべるタマかよ。ムダ、ムダ」と、上司らしい男が言ったのははじめ、刑事からも検事からもあまり「期待」されなかったので、取調べは比較的ラクだった。ある仲間などは、連日、朝早くから夜おそくまで取調べが続いていた。権力がわざと、ある人には取調べをきびしくし、別の人にはゆるくして分断し、孤立感を深めようとしているのがわかった。まったくドジにも身元を証明する物をたくさん持ってつかまったわたしは、「名前まで黙秘したってしょうがないじゃないか」と言われたが、彼らが勝手に調べるのはしかたがないけれど、こっちら教えてやる気にはとてもなれなかった。一人、年配の刑事が「えっちゃん、えっちゃん」を連発するのはうんざりしたが、そのゾットする呼びかたをやめさせ、留置番号で呼ばせるのにはなんとか成功した。

そのころのわたしは、ごくささやかではあるが山谷の運動にかかわっており、したがって、わたしがたまたま連れていかれた南千住署（四〇人の仲間は都内の各警察署に、二、三人ずつ分離勾留されていた）の刑事に顔を知られていたらしかった。また、わたしの仕事、『新地平』（権力から見れば「過激派」の雑誌になるのだろうか）の編集だということがわかったので、刑事はそれらについてもしつこく聞き出そうとした。

彼らの辞書の中には「団結」とか「連帯」ということばがないらしく、わたしたちの行動はどうにも理解しかねるらしい。「おまえは奄美の純朴な人たちをだまして自分たちの勢力（ってなあに？）拡大に利用しようとしているんだろう」とか、あとで聞いたのだが、奄美の青年たちは、「おまえたちは利用されているんだ」ときんざん言われたという。「卑怯じゃないか。おまえが責任をとって罪をかぶれば他の人たちは出られるんだ（これはまったくのウソ！）。ヤクザだってそのくらいの人間味はあるぞ！」

人と人との関係を「利用する・利用される」としか見られない、あるいは、わたしたちの行動を、自分の意志を殺し、なにか、上からの指令にロボットのように従っていると考えたがるのは、彼らの存在のしかたの反映だろう。私が他のことはいっさい黙秘のまま、「ずいぶん変な考えかたですね」と言う、刑事は露骨にイヤな顔をした。

検事は刑事よりもはるかに階級的なものの言いかたをする。刑事はあたかも被疑者と同じ「立

場”でいるかのようなふりをしてしゃべらせようとするが、検事の場合は“立場”の違いを見せてつけて「強情を張っていると、どうなるかわかっているんでしょね」とおどかさすのだ。担当の検事は「奄美」を読めずに「あつみ」と言った。おそらく奄美がどこにあり、どんな歴史を背負い、また、今どんな状況に置かれているかの一片すら知らないだろうこんな検事が、奄美に関する重大な問題に口を差しはさむ権限をもっていることに、わたしは怒りを抑えられなかった。

けっきょく、わたしは警察の留置場に一三日間勾留された。そして、この生まれて初めての経験の中でたくさんのことを学んだ。現在の社会を維持していくためにさまざまな「罪」名をかぶせられて獄中生活を強いられている人びとの出会いは、この社会の抑圧・被抑圧の関係を手にとるように見せてくれたし、刑事や検事の取調べ、獄外の仲間からの差し入れや激励は、権力の本質と、それに抗する団結のすばらしさを肌でわからせてくれた。そしてなによりも、わたしは獄中で、いまだその歴史も文化もほとんど知らないながら、ヤマト資本の侵略をはねのけて自立をちとろうとする奄美のたたかいに、自分が切っても切れない絆で結びつけられたのだ、というのを直感的に感じとっていた。

シマの男との出会い

東燃本社抗議団四〇人全員逮捕の知らせを受けて、枝手久闘争の現地・奄美大島宇検村から救援部隊が急拠、上京してきた。在関東のおもだったメンバーがすべて逮捕されてしまったために残っている人間だけでは救援態勢がととのわなかったからである。現地から来た人びとは、慣れない東京で、弁護士の手配、逮捕者への激励・差し入れ、奄美出身者への支援依頼などにかけてずりまわったが、その中に、いまのわたしのつれあいであり、全員が石油企業誘置反対派の平田部落に住む新元博文がいた。

わたしが釈放されて二三日後の一月二五日（そのときまでには、起訴された三人を除くほとんどの逮捕者が釈放されていた）、東京の豊島公会堂で、枝手久闘争に対する大弾圧への反撃の「祭り」が開かれた。会場には、現地からもってきた大漁旗が張りめぐられ、奄美の唄あり踊りあり、「反弾圧祭り」の名にふさわしく、侵略されつづけてきた奄美の歴史の重さからくる東燃への燃えるような怒りと同時に、内に激しいエネルギーを秘めた奄美の文化が会場いっぱいにあふれる集会となり、型にはまった無味乾燥な集会しか知らない参加者たちに新鮮な衝撃を与えた。この「祭り」は東京の運動関係者たちから、一九七〇年代の最後を飾る、七〇年代でいちばんいい集会だった、と言われたが、わたしはこの夜はじめて、壇上で奄美の自立のたたかいについて語る新元博文を、いまだ留置場ボケのさめやらぬ眼で見たのだった。

この集会が終わると現地の人びとはみな帰っていったが、新元博文は、あとを託されて東京に

残り、一二月末まで東京中を走りまわっていた（それも警察の尾行つきで）。わたしはその間に、『新地平』誌の取材などで彼に二、三回会う機会があったが、その時点では、一年後に彼といっしょにシマで暮らすことになるなどとは、もちろん夢にさえ考えられないことであった。

釈放後、あわてて読んだり聞いたりした奄美の歴史や文化、たたかいは、わたしの体内深くどんどんしみこんでいくようだった。わたしは、奄美を侵略・支配し、奄美の人びとの血と汗と涙の上に繁栄を築きあげてきた薩摩の出身（わたしは鹿児島県川内市で生まれ育った）でありながら、うかつにも、それまで奄美のことをほとんど知らずに生きてきたのである。学校教育の中でも、奄美のことはすっぱり抜けおちていた。

鹿児島にいまだに根強く残る男尊女卑の制度と、女をがんじがらめにしぼりつける血縁共同体の網の目から、もがくようにして都会に逃れてきていたわたしは、「女の自立・解放」という課題をつねに考えないわけにはいかなかったが、そんなわたしにとって、奄美の自立は男の論理（大きいもの、強いものにつく）を廃し、女の論理（小さいもの、弱いものをいつくしむ）に依拠しなければかちとれないと語る新元博文の話は、きわめて興味深いものだった。一九八〇年の新しい夜明けを迎えて、わたしは、具体的にはわからないけれども、奄美のたたかいのふれあいを通して、この年、わたしの生きかた、女解放のたたかいを大きく変えるなにごとかが起こりそうな予感を強くもっていた。

シマはわたしを揺り動かした

一九八〇年七月末、前年からはじめていた琉球弧住民運動交流合宿（第一回目は三菱CTSとのたたかいをつづけている沖縄・金武湾で開かれた）の第二回目が、枝手久闘争の現地・奄美大島宇検村平田部落で行なわれることになった。わたしは矢も楯もたまらず参加者の一員となり、ふるえるような思いで、奄美へと、こころとからだを走らせた。

島外からの参加者を、名瀬の港から会場の平田部落海岸まで運んでくれた名瀬の仲間の車で、くねくねと曲がりくねったえんえん二時間半の道のりをたどって平田海岸に降り立った瞬間、わたしは地面が揺り動かされるような激しい衝撃にとらえられて、その場に立ちすくんでしまった。それがどこからきたものなのか、わたしにはわからなかった。碧く澄みきった焼内の海、そこに浮かぶ枝手久島のやさしいシルエット、人の心を包みこむような平田集落のたたずまい——すべてが、あくまでも美しく、やさしく、この世のものとも思えなかった。わたしはなにかにとりつかれたように、心の中で手を合わせながら、熱にうかされた眼で、神のシマといわれる枝手久島を、ただただ、見つめつづけていた。

そんななかで、わたしは新元博文と再会し、その夜、わたしと彼は結ばれた。それは、生まれてはじめて飲んだ黒糖焼酎のせいだったのかもしれないが、わたしたちは、枝手久の神さまがわ

たしたちを結びつけてくださったのだと固く信じている。

わたしの頭の中から、東京での仕事や運動のことも、五年間、仕事と生活とを共有してきた男のことも、自分が三〇歳をとうに過ぎて恋にくるうような年齢でないことも、すべて追い払われ、わたしの心はただひたすら、シマと、シマに生きる一人の男に全身全霊をあげて向きあおうとしていた。わたしは、足元がグラグラするのを感じながら、それでも、ありったけの「理性」をかきあつめて、ともかく東京へもどって少し冷静に考えてみよう、合宿のあと、いったん帰京した。

それからの一カ月間、表面的には仕事もいちおうやり、運動関係のスケジュールもなんとかこなしていったが、こころはいつも上の空、新元博文に手紙を書く時と、彼からの手紙（たいてい味も素っ気もないものだったが）を読む時だけが、やっと生きているようなものだった。ついにわたしのころは「シマに帰りたい」というひとつの願いではりさけそうになり、九月なかば、なけなしの金をはたいて再びシマへ渡ったのである。

シマはちょうど、八月踊りの真最中だった。わたしはシマンチュウ（島人）といっしょに、踊りの輪の中で真夜中まで踊った。新元博文は「オレといっしょになるか？」と言った。わたしは、もうどこへも行きたくなかったけれど、東京にはたいせつな仕事も、責任を果たすべき運動も、また、一人の男との生活もあり、それらのすべてにどう結着をつけてここへ来られるのかと思う